

1930年代イギリス知識人の肖像：サー・リ チャード・リース（1900～70）管見

川成, 洋 / Kawanari, Yo

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

512

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2001-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009030>

1930年代イギリス知識人の肖像

サー・リチャード・リース (1900~70) 管見

川成 洋

- 1 ジョージ・オーウェルの消息を訪ねて
- 2 『アデルフィ』の辣腕編集者
- 3 イギリス人医療部隊員
- 4 野戦病院の日々
- 5 「キューカー」の救援組織に加わる
- 6 帰国後の活動 絵筆と文筆

1 ジョージ・オーウェルの消息を訪ねて

1937年4月、新調したばかりの見慣れぬ上下揃の制服を着込んだ十数人の団体がロンドンのビクトリア駅に集結した。彼らの制服はイギリス人医療部隊の救急車運転手用のものであった。

20代前半の若者たちからなるこの一団には、何となく陽気な気分が漂っていた。だが、ただ一人、見るからに年をとり、頭髮も薄くなりかけた男がその団体に混じっていた。当時、37歳のリチャード・リースである。

リースはほかの若い隊員と異なり、気持が高揚したり、深いもの想いに沈んだりして、複雑な心境にかられていた。ビクトリア駅に見送りに来た友人の一人は、彼のいでたちを見て、ヒトラーの「ブラウンシャツ」の連中と間違えそうになったなどと冗談を飛ばしたが、彼はそれにも特に反応しなかった。

リースは自分のスペイン行きの動機を自覚していたはずだ。それは大学生の頃から考えていた社会主義社会の達成のために、あるいはヨーロッパの労働者階級の団結のために、わが身を賭けることであった。これは当時としてはごく当たり前の左翼青年の反応と考えられよう。だがこれとは別に、彼には他人には言えない理由の二つがあった。

その一つは、文芸季刊誌『アデルフィ』(*The Adelphi*)の読者を対象にして1934年に創設された、左翼リベラリズムを基調とする一週間の合宿制の「アデルフィ・サマースクール」の運営をめぐる政治路線上の対立と、さらには36年に「独立社会主義者大学」(*Independent Socialist University*)と命名するはずの労働運動家の育成センターの創設へ向けて活動中に、その創設者グループ内で起

こった深刻な確執などに嫌気がさしてしまい、そこから逃げ出したくなったことである。

もう一つは、6年前に知り合い、作家の道を歩み始めた3歳年下の親友のジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) がアラゴン戦線の塹壕のなかで戦っているという噂を聞き、自分がスペイン行きをけしかけたこともあって、彼のことが急に心配になり、会いたくなかったことである。

リチャード・リースは正式にはサー・リチャード・リース (Sir Richard Rees) といい、世襲の准男爵である。

リースは1900年4月4日、保守党下院議員サー・ジョン・デイヴィッド・リース (Sir John David Rees) のひとり息子としてオックスフォードに生まれた。彼の生家は由緒ある家系で、とくに母親のメアリーはドーマ卿の血筋を引いていた。彼は幼少の頃から貴族として厳格な教育を受け、やがて当時の上流階級の優秀な子弟と同様に名門のパブリック・スクール、イートン校に進む。この頃は、第一次大戦期でもあり、キッチナー (Horatio Herbert Kitchener, 1850-1916) 陸相の「青年よ、君の義務だ」のポスターで謳われた兵力増強策を実現するための新兵募集に数十万の青年が応じた。彼も年齢的に志願できないのを残念がった愛国少年の一人であった。1919年6月、リースはイートン校を卒業し、10月にケンブリッジ大学トリニティ・コレッジへ進学した。大学での専攻は英文学と歴史学であった。彼の在学中は、第一次大戦の終結によって平和な世界が到来したものの、イギリス国内は大変な経済不況に襲われた。戦争に疲弊したヨーロッパ各国の購買力は低下し、ことに莫大な賠償金を課せられたドイツは、マルクの急落によってイギリスの海外市場を食い荒らした。当然、失業と賃金カットの問題が全国的規模で広がり、労資の対立、労働者側のストライキなどもひんばんに起こった。

こうした社会的に不安定な要因は政界にも波及し、1920年8月、イギリス共産党が結成された。その二年後には、労働党が第二党に進出した。

1919年の年末、父親の死去によって、リースは世襲の准男爵に叙されることになる(だが、自分の名前に "Sir" という称号を書き入れることはなかった)⁽¹⁾。これで、今までの父親からの束縛がなくなり、精神的に自立した生活ができるようになった。彼は入学以来、密かに接触してきた「労働党クラブ」の正式メンバーとなる。このクラブは当時、総員百人くらいの労働党の学生組織であって、24年に最初の労働党政権が誕生して以来、同党に有為の人材を送り込む母体となったのである。しかしリースたちは、立憲主義・議会主義を標榜する労働党のプロパガンダだけに終始し、とりたてて目立った活動はしなかった。

1922年6月、ケンブリッジ大学を卒業したリースは、ベルリンのイギリス大使館に無給の客員大使館員として一年間滞在し、ベルリンを中心にドイツを見聞する。彼が滞在していた頃は、マルクの急激な下落による経済混乱、ナチスの台頭、第一次大戦の賠償支払いの不履行によるフランス軍のルール地方占領などで、ドイツが大きく揺れ動いている時期であった。

帰国後、リースはロンドンにとどまって外交官の道に進まず、ケンブリッジの町に戻って、ケンブリッジ大学出版局の編集部勤務した。そのかわり、有力紙誌に寄稿し、評論界に頭角をあら

(1) Stansky, Peter & Abrahams, William. *The Unknown Orwell*, Paladin, 1984, p.248.

わすようになった。

また、25年から二年間、従来の労働運動とは別の、労働者の文化・教育を主軸とする労働者教育協会ロンドン支部の無給の会計係兼講師を務めた。

一方、彼は政界へ進出する希望ももっていた。リースは24年に労働党に入党し、29年の総選挙には、労働党をさらに活性化させるためにケント州ジリガムから下院議員に立候補するが、落選してしまった。これ以降、政界入りを断念した。

2 『アデルフィ』の辣腕編集者

1930年からは6年のあいだ、リースは、ジョン・ミドルトン・マリー（John Middleton Murry, 1889-1957）が編集・発行していた『アデルフィ』の共同出資者兼編集者として辣腕をふるった。彼が実質的な編集者となるや否や、彼の発案で季刊を月刊とし、より明確な政治的論調を取り入れるようになる。この頃『アデルフィ』に発表された詩を、シビル・コナリー（Cyril Connolly, 1903-74）は、「エンゲルスの踏み込むことをはばかるところ」（Where Engels Fears to Tread）のなかで、次のように見事にパロディ化している。

M is for Marx
and Movement of Masses
and Massing of Arses
and Clashing of classes.⁽²⁾

また、従来の評価の定まった文学者だけを執筆陣にかかえていた方針を変更して、後年ジョージ・オーウェルとなって文名を馳せることになるエリック・ブレア（Eric Blair）のような、あるいはディラン・トマス（Dylan Thomas, 1914-53）やレイナー・ヘッペンストール（John Rayner Heppenstall, 1911-81）のような貧しい文学青年たちに作品を発表する場を与えた。彼はそうした文学青年たちの心優しい、潤沢なパトロンの存在だったのである。M. シェルダンも、『オーウェル』（Orwell, 1991）のなかでこう述べている。

Rees must be given credit, however, not only for encouraging Orwell's literary ambitions in the early years, but also for introducing him to other writers in London. Once such introduction took place on an evening in early 1935, when he and Orwell were at Bertorelli's on Charlotte Street. Joining them for dinner that night were two young writers whose careers had received Rees's support — Dylan Thomas and Rayner Heppenstall. As usual, Thomas

(2) Rees, Richard. *George Orwell: Fugitive from Camp of Victory*, Secker & Warburg, 1961, p.144.

Mという字はマルクスを、
大衆（Masses）の運動（Movement）を、
尻の群がり（Massing）を、
階級同士のぶつかり合いを表す。

was more than a little drunk and did not seem remember anything of the meeting, but Heppenstall did, and he soon became one of Orwell's friends. At that time Heppenstall had published only poetry and reviews and was still a few years from finishing his first novel.⁽³⁾

ところで、オーウェルの原稿が、『アデルフィ』に掲載され、やがてオーウェルが定期的な寄稿者の一人となった頃、リースは彼を「知性があって有能」だけれど「特に独創的で天賦の才がある」とは思っていなかったものの、オーウェルには”The jealous, pushful, intriguing, self-centred mentality which is so common among young ambitious literary men.⁽⁴⁾」がどこにも見当たらなかった。これが、リースのオーウェルに対する評価の原点であった。それにしても、当時のオーウェルは貧しかった。印税、原稿料と店員の給料を合わせて、年200ポンド稼ぎだせば幸運であった⁽⁵⁾。一方、その頃のリースは、自叙伝『わが年代論』(A Theory of My Time, 1963)のなかで、こう自分の状況を述べている。

I have never had the spending of much less than £1000 a year of unearned income, and sometimes considerably more, even after deducing tax and allowances to relatives. Before the war, this was wealth, especially for an unmarried man. Many of my socialist and intellectual friends were paupers compared me.⁽⁶⁾

果せるかな、というべきか、ジョージ・オーウェルの初期の作品に、自伝的要素の濃厚な『葉蘭をそよがせよ』(Keep the Aspidistra Flying, 1936)というのがある。

主人公のゴードン・コムストック(Gordon Comstock)は、売れない月並みの詩を書き、小さな書店の店員をして辛うじて生活を支えている29歳の男である。彼は自らを社会的アウトサイダーと認めている。ゴードンには、親友のラヴェルストン(Ravelston)がいつも援助している。彼は家柄がよく、金持ちであることに肩身が狭いと思っている、左翼月刊文芸誌『アンチ・クライスト』

(3) Shelden. op. cit., pp.224-5.

リースは早いときにオーウェルの文学的な野心を励ましたばかりでなく、ロンドン文壇の作家たちに彼を引き合わせたことで褒められるべきだろう。そのような紹介のひとつが1935年の早い時期のある夕刻、ふたりがシャーロット・ストリートの「ベルトレッリ」の店にいたときに行われた。その夜、夕食に合流したのは、その文学的活動がリースの指示を受けていたふたりの若い書き手 詩人のディラン・トマスと作家のレイナー・ヘッペンストールだった。いつものようにトマスは少し飲みすぎていたから、そんな会食を覚えていないかのように見えるが、ヘッペンストールはしかと覚えている。そして間もなくオーウェルの親しい友人となる。当時、ヘッペンストールは詩や書評しか発表していなかったし、第一作目の小説を書き上げるのはまだ数年先のことであった。

(4) Rees. op. cit., p.143.

若い野心的な文学青年にありがちな嫉妬、強引さ、へつらいといった自己中心的な精神。

(5) Shelden. op. cit., p.204.

(6) Rees, Richard. A Theory of My Time: An Essay in Didactic Reminiscence, Secker & Warburg, 1963, p.63.

私は年間の不労所得を1000ポンドくらいしか小遣いに使えなかった。もっとも時には税金や親戚の者に支払う手当てなどを差し引くと、それ以上の金額になる場合もあった。戦争前は、とくに未婚の男性にとってこれは富だった。多くの親しい社会主義者や知識人は、私に比べたら貧者であった。

の編集者である。彼はゴードンのようなしがない無名の作家志望の青年たちに、自分の雑誌に書かせている。ある日、ゴードンは苛立って、ラヴェルストンに言う。

‘ This life we live nowadays! It’s not life, it’s stagnation, death-in-life. Look at all these bloody houses, and the meaningless people inside them! Sometimes I think we’re all corpses. ’

‘ But where you make your mistakes, don’t you see, is in talking as if all this was incurable. This is only something that’s got to happen before the proletariat take over. ’

‘ Oh, Socialism! Don’t talk to me about Socialism. ’

‘ You ought to read Marx, Gordon, you really ought. Then You’d realize that this is only a phase. It can’t go on for ever. ’

‘ Can’t it? It feels as if it were going on for ever. ’

‘ It’s merely that we’re at a bad moment. We’ve got to die before we can be reborn, if you take my meaning. ’

‘ We’re dying right enough. I don’t see much signs of our being reborn. ’

Ravelston rubbed his nose. ‘ Oh, well, we must have faith, I suppose. And hope. ’

‘ We must have money, you mean, ’ said Gordon gloomily.

‘ Money? ’

‘ It’s the price of optimism. Give me five quid a week and I’d be a Socialist, I dare say. ’⁽⁷⁾

(7) Orwell, George. *Keep the Aspidistra Flying*, Penguin Books, 1992, p.92.

「今日のわれわれの生活なんて！ これは生きているなんていうものではなくて、澁み滓だし生きながらの死なんだ。あのボロ家とあそこに存在する意味のない人たちを見なさい！ われわれはみんな死骸みたいなものだ、と時どき思うんだ」

「だがね、君はどこかが間違っているということに気づいていないのだ、こうした事態が解決不可能などと言っている限りではね。こうしたことは、プロレタリアが権力を握る前にたまたま起こらねばならない事態に過ぎないのだよ」

「あア、社会主義か！ 社会主義に関してぼくに説いてくれるなよ」

「君は、マルクスを読むべきだ、ゴードン、実際に読まねばならない。そうしたら、この状況がたんなる一段階にすぎないのだということを悟るだろう。いつまでも続くわけがないさ」

「続くわけがないって？ いつまでも続くように思えるのだが」

「われわれはいま悪い時期に生きているというだけなのだ。再び生まれ変わるまえに、一度死ななくてはならないのだ、ぼくの言っている意味が分かるだろう」

「われわれはもう死んでいるよ。再び生まれ変わるようなしるしはないよ」

ラヴェルストンは困惑して言う。「あア、それでは、われわれは信念を持たねばいけない。そして、希望も」

「つまり、われわれは金をもたなければならないというんだらう」とゴードンは憂鬱そうに言う。

「金だって？」

「オプティミズムの代償というもんだ。ぼくに週5ポンドの給料をくれれば、ぼくはきっと社会主義者になれるだろうよ」

この作品のなかで、ゴードンのモデルはジョージ・オーウェル、否、作家以前のエリック・ブレアであり、ラヴェルストンのモデルは、リチャード・リースである。ラヴェルストンは、理想主義的社会主義者と呼ぶにふさわしく、階級的頹廢に染まらないのと同様にラディカルなボルシェヴィキの要素をも持ち合わせていない人物として描かれている。これこそ、現実のリチャード・リースの生き写しであろう。

1936年8月にオーウェルは『アデルフィ』の夏期講習会に講師として招かれ、「アウトサイダーが見た窮乏地域」(An Outsider Sees the Depressed Areas)という表題の講演を行った。オーウェルはさらに政治討論会に参加し、一部のマルクス主義者と論争をした。それを聞いたリースは、次のように回想している。

Without any parade of learning he produced breath-taking Marxist paradoxes and epigrams, in such a way as to make the sacred mysteries seem almost too obvious and simple.⁽⁸⁾

やがて、『アデルフィ』がスペイン内戦に対して逃避的な姿勢をとったために、リースは、同誌から手を引き、財政的な援助をも打ち切ってしまった。

3 イギリス人医療部隊員

1937年4月、リースはイギリス人医療部隊の一員として、カタルーニャ自治州の州都、バルセロナに着いた。もちろん、G. オーウェルとの再会を楽しみにしていたのだった。しかし、オーウェルはすでにアラゴン戦線のアルクビエーレの塹壕のなかにいた。そこは、バルセロナの西方約360キロで、サラゴサとウエスカの間辺りの戦線突出部の高地であった。リースが彼に会うには、あまりにも離れすぎていた。

リースが着いたころのバルセロナには、スペイン内戦勃発時にあった市井の民衆の革命的エートスはすでに消滅していた。3月にバレンシアで開かれたスペイン共産党大会の結果、反POUM闘争の強化、反宗教闘争の否定と土地闘争の否定、軍隊の統一と産業の再編成化といった方針が打ち出され、共和国陣営が内部抗争寸前の不安定な状態だった。だが、到着したばかりの彼には、そうした不気味な政治的蠢動を察知できるはずもなかった。

リースはオーウェルの消息をえようと、さっそく彼の妻アイリーン (Eileen Blair) に会う。そのとき、彼女はバルセロナの「ランブラス」に面しているPOUMの党本部に秘書として勤めていた。リースによると

She seemed not so much surprised, as scared, to me, and I accounted for her, odd manner by the strain of living in a revolutionary city with a husband at the front. When she said she could not come out to lunch with me, because it would be too dangerous for me to be seen in public with her, I supposed I must misheard her and made not comment . . . In Eileen Blair I

(8) Sheldon. op. cit., p.248.

知識をひけらかすこともなくハッとさせるようなマルクス主義の逆説や警句を繰り出すことで、神聖な秘教がほとんど単純素朴なものに過ぎないと見せたのである。

had seen for the first time the symptoms of a human being living under a political Terror.⁽⁹⁾

ちょうどイギリス人ジャーナリストが彼女をさがしていたらしく、レストランで同席することになった。いろいろと話をしているうちに、彼女がPOUMの党本部で働いていると言うと、そのジャーナリストは真っ青になって急に話題を変え、あたふたと席をはずしてしまった。

その日の夜、イギリス人医療部隊の責任者が隊員全員を集めた。その責任者は、何人も隊員がPOUMの党本部に入って行くのを目撃されているが、そこには絶対近づかないようにと、厳しい調子で忠告した。その時点では、リースはアイリーンと例のジャーナリストのおびえた様子からも、政治テロに恐れおののく彼女の心情を感知できなかったのである。数日間のバルセロナ滞在中、リースは不確かながらも、POUMと密接な関係のあるオーウェル夫妻の身に危険がしのび寄っていると感ずるようになった。だが、イギリス人医療部隊の行動予定には従わねばならず、次の目的地であるバレンシアへと向かった。リースが着いたころのバレンシアの様子を、その3カ月後にアメリカ人大隊のなかの黒人兵の立場を取材するために訪れたアメリカの黒人詩人、ラングストン・ヒューズ（Langston Hughes, 1902-67）は、こう述べている。

They had good wine and good food fresh fish, melons and the sweetest of oranges and grapes much more food than any other city I visited in Spain. And there were parks and bathing beaches, music and dancing, anti-aircraft guns making fireworks in the sky every night, and tracer bullets arching like Roman candles in the air as Franco's bombs lighted up the port. The docks were miles from the heart of Valencia, so whenever an alert sounded, the citizens would say, " Oh, they're just going to bomb the port, not us. " And they kept right on doing whatever they were doing. Nobody bothered much to seek shelter.⁽¹⁰⁾

ここには緊迫した様子はうかがわれぬ。それは、このヒューズの楽天主義の眼から見たためというよりも、マドリードの重包囲がつづくかぎり、おそらくバレンシアが銃後という安全な位置にあったことによるもので、陽気なバレンシア気質ともあいまって、比較的のんびりとしていたのではなからうか。リースはバレンシアのある書店でつぎのような事実を目撃している。その書店には、

(9) Rees, Richard. *For Love or Money*, Southern Illinois University Press, 1960, p.153.

彼女は私に会ってさほど驚いているようには思えなかった。脅えているようだった。こうした彼女の奇妙なしぐさは夫が最前線に赴き、革命的都市の中で生活するストレスのためだと私は判断したのだった。彼女と一緒にいるのを見られるのがあまりにも危険なので、彼女は私と一緒に昼食を取ることができないと言った時ですら、私は彼女の言っていることをよく聞き取れなかった……アイリーン・ブレアの中の人間が政治テロの真っ只中で生活しなくてはならないような兆候を初めて見たのだった。

(10) Hughes, Langston. *I Wonder as I Wander*, Rinehart & Company, 1956, p.467.

わたしが訪れたスペインの他のどの都市よりも、ここはずっと豊富に食べ物があつた。公園や海水浴場があり、音楽やダンスもさかんだったが、毎晩、空には高射砲が花火を作り出していた。フランコ軍の爆弾が港をばつと照らしたとき、空中には曳光弾が筒型花火のようにアーチの弧を描いた。波止場はバレンシアの中心地から数マイル離れたところにあつたが、警戒警報のサイレンが鳴るたびに、町の人びとは「おれたちではなくて、港を爆撃しようとするのさ」といつていた。市民はたとえどんなことをやっても、それをまっしぐらにやり続けるのだった。防空壕を探そうとして、そんなに気を使うものはいなかつた。

ソ連の国内政策を痛烈に批判したアンドレ・ジード (André Gide, 1869-1951) の『ソビエト旅行記』 (*Retour de l'U.R.S.S.*, 1936) が一冊置かれていた。リースがその本を見るとはなしに眺めていると、一人の中部ヨーロッパ人とおぼしき政治委員が店主を呼びつけ、その本を指して、「なぜこんな本を並べているんだ。これは君たちに敵対した内容が書かれているんだ」と怒鳴った。店主は慌ててその本を片づけてしまった。

バレンシアには、1936年11月6日よりスペイン共和国のすべての政府機関が移転し、それにとまってイギリス人医療部隊の本部も引越してきた。この本部の責任者は、イギリス陸軍省 (Pall Mall) から直接派遣されたと思われるイギリス人貴族と、イタリア系イギリス人貴族の奥方であった。リースはイギリス人医療部隊の一員として参加していたので、当然バレンシアではこの本部に出頭した。ここで新参者のリースと友人のローバート・ウイラー (Robert Wheeler) の二人の任務地が決まった。それはマドリッドより80キロ離れた、バレンシア公道沿いのタランコンにある、アメリカ人の管理する病院であった。そこで働いているアメリカ人は、驚くべきことにほぼ全員ニューヨーク出身で、仲間うちでは、ユダヤ人のしゃべるイーディッシュ語を話していた。彼らは間違いなくアメリカに亡命したユダヤ人であった。

入院患者はそれほど多くはなかったが、看護人がだれも世話をしつけない患者が一人いた。その世話を新参者のリースとウイラーが押しつけられたのである。この患者はアメリカ人大隊の負傷兵で、足もとで手榴弾が炸裂したために両目を失明し、全身どの部分も変形してしまっていた。

二人の任務は、日光浴のために毎日彼を田園地帯へ連れ出すことであった。その負傷者は、たえず意味のよく聞きとれない苦痛のうめき声を発し、ことにベッドから降ろしたりベッドに寝かすときは、常に悲鳴をあげるので、手のつけようがなかった。ベッド・シーツに彼のつま先が触れると、「俺のつま先！俺のつま先！この野郎！」 (My toes! My toes! Damn you!) とどなり、その声は恐怖の限界を越えたものだった⁽¹¹⁾。

この負傷兵と日常的に接していて、リースは負傷兵には神経質なほど細心の注意を払うことができたが、同情心を抱く心の余裕がだんだん摩滅していった。近い将来の自分の姿を、いま眼前にいる負傷兵に重ねあわせるようになった。おそらくリースは知らなかったであろうが、実はこの負傷兵はアメリカ向けの反ファシスト運動のシンボリック的存在であって、当時熱烈な共和国支持者の37歳のヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) が「とても陽気な不屈の精神の男」⁽¹²⁾とほめそやしていた (ちなみに、ヘミングウェイの「マドリッドの無感覚」という長い記事が、『東京朝日新聞』の1937年7月19日号に掲載されている)。こうした、なんとも憂鬱な看護の日々が2週間続いた。その間、周囲の状況が徐々に見えるようになってきた。リースと接触のあったスペイン人以外の外国人はすべて共産党員か、党員特有のしゃべり方をしていた。バレンシアの例の二人の貴族も、例外ではなかった。彼らは人に会うたびに共産党に入党するよう勧めたが、彼は万一戦死することがあっても、党員として死にたくはない、という決意がさらに固くなるばかりであった。

(11) Rees. *A Theory of My Time*, p.96.

(12) Stanton, E.F. *Hemingway and Spain: A Pursuit*, University of Washington Press, 1989, p.146.

4 野戦病院の日々

2週間後、リースに救急車の運転手としてコルドバ戦線への移動命令がくだった。その途中で、リースの部隊が休息のためにある村にたち寄った。村で目に見えるものといえば、たった一軒のカフェだけだった。そのカフェの壁には、アナキストのCNT = FAIのイニシャルが描かれていた。これを見た指揮官が「ほかの場所に行ったほうがよい。ここはアナキストの連絡所だから」と言ったので、リースらは別な村へ行って休息することになった。

リースらは、戦争のためあたり一帯の農地がほぼ荒廃したラ・マンチャ地方からアンダルシア地方に入り、コルドバの北70キロのポソブランコの町を過ぎて、コルクがしわ、ラベンダー、野生のバラの林に着いた。この林の中には、さっそく新しく野戦病院が設営された。医師たちも先の病院とちがいで、アメリカ人やドイツ語をしゃべる中部ヨーロッパ人であった。

戦線自体はすでに膠着状態であり、一見のどかであった。

ある日、敵の飛行機が低空飛行で飛んできて爆弾を落としたが、どれも命中せず、被害はまったくなかった。リースにとってはじめての体験だったが、別段、恐怖心も湧かなかった。その飛行機は爆弾以外にピラをたくさん散布して飛び去った。そのピラは、次のように印刷されていた。

' Foreigners! You have been forced into the ranks of the Red deceivers of the workers, after being bamboozled with promises which have not been kept, of work and fabulous wages. Hear our call! Anyone who comes over to us with his arms will be welcomed and sent back home at the Government's expenses. '⁽¹³⁾

このピラは決して読んではならず、回収されて、焼却された。

この飛行機のピラ事件を除けば、5月と6月はまったく穏やかな日々で、まるで毎日がピクニック気分であった。ほぼ40キロ西方にあるフンテオピフーニャの村が最前線だったが、リースたちは時たま思い出したかのようにその村の方向を眺めて過ごしていた。リースは、退屈しのぎに、気障で血気さかんな青年が故国にいる叔母に宛てた手紙を綴っているという想定で、アメリカ人義勇兵と一緒にいる前線の生活ぶりを面白おかしく書いてみた。それがただちにガリパンで複写され、回覧された。仲間から続篇を頼まれ、悦にいとっていると、国際旅団の政治委員と思われる中部ヨーロッパ人の将校が、もうこの種の手紙を書かないようにとリースに命令とも警告ともつかない言い方で迫ってきた。手紙自体はまったく害のないものだが、万一敵の手にそれが渡ったら、前線での規律が乱れているという印象を与えるからだった。例の手紙は即座に回収され、ドイツ軍のピラと同じ運命を辿った。

(13) Rees. *A Theory of My Time*, p.97.

外国人よ！ 諸君は労働者の赤どもに騙されて、無理やりここに連れて来られたのだ。仕事と十分な給料という、決して守られもしない約束に騙されて。

われわれの呼びかけを聞きなさい！ 各自の武器をもってわれわれの陣営に来る者は歓迎される。わがドイツ政府の費用で諸君を母国へ送還する。

こうした締めつけが、一番楽しいはずの食事にも起こったことがあった。食事は最前線と異なり、量も十分だったし専属の炊事兵もいた。陽のさんさんと輝くある朝、屋外でくるま座になって朝食をとっていると、炊事兵の一人が革命に関して好意的な意見を二言三言口にした。するとただちに熱狂的な共産党シンパに囲まれてしまい、彼の政治的無知が訂正されるという始末だった。彼らは「同志、これは革命ではない。戦争なんだ。ファシズムと戦う民主主義擁護の戦争なんだ」⁽¹⁴⁾と、狼狽しているその炊事兵に詰め寄った。幸い、リースも含めて周囲にいた連中が両者のあいだに割って入り、事なきを得た。それ以降、「革命」という言葉はタブーとなってしまった。

6月中旬、リースの所属するイギリス人医療部隊は、マドリード北西部のエスコリアル宮殿に集結した。彼が配属された部隊は国籍不詳の医師たちによって指揮されたが、救急車の運転手は主にイギリス人であった。ここで、「ブルームスベリーの申し子」というべき、詩人で英文学者のジュリアン・ベルと一緒に任務につくことになった。

かつて、フェリペ2世（Felipe Ⅱ，在位、1556-98）時代につくられた「陽の沈むことなき」スペイン帝国の栄光をそのまま体現している重厚なエスコリアル宮殿のテラスから眺めると、ジグザグに連なる観光客用の小径が見え隠れし、遙かマドリードを中心とするカステーリャの平原の上には青く澄み渡った大空が開けていた。この青空に、時たま高射砲の白い煙がパッと広がった。彼がエスコリアル詣での観光客ではないという実感を抱いたのは、この高射砲の白い煙のためではなく、自分の周りに右往左往しているものがすべてカーキ色の塊りに見え、人間のように感じられなかったからだった。

こうして数日が過ぎたある日、高射砲が爆撃機をうち落とす。その敵機はものすごい音をたてながら錐揉み状態のまま落下し、視界から消えてしまった。

救急車の司令部は、ピリャヌエバ・デ・ラ・カニャーダ村からちょっと離れた林のなかにあった。ここは少し前までフランコ軍の塹壕のあったところで、防空壕として使うことができた。ここから30キロ北方のエル・エスコリアルには野戦病院が設置され、前線応急手当所にいる負傷兵をその病院まで輸送することになっていた。ただ、昼間は救急車の赤十字のマークが敵機や野砲の的になるので、その輸送は夜間、無灯下で行わなくてはならなかった。しかも道路は砲弾でデコボコであり、夜間といえども軍用トラック優先の往来が激しく、それらの合間をぬって救急輸送が行われたのである。

重傷兵のなかには輸送中、昏睡状態のものもいたが、野戦病院に着いた頃にはすでに絶命している兵士もいた。

救急車の運転手はみな夜間輸送のためにまともに睡眠時間がとれなかった。リースもいねむり運転防止のために、というか、睡魔におそわれハンドルすら握ることができず、やむなく道路わきに停車して眠ることがしばしばあった。

フランコ軍の猛反撃をうけて、共和国軍の指揮系統は乱れに乱れ、救急車司令部も転々としていた。リース自身、司令部と連絡がとだえてしまった。彼が前線のあちこちをさまよっていると、急に暗がりから車の停止を求められた。それは共和国軍のスペイン人将校で、救急車と運転手を徴用

(14) Ibid., p.98.

するというのである。将校はピストルを突きつけ、マドリードへ行けと命令した。将校は脱走を図っているとリースは判断したが、彼に抵抗もできず、マドリード方向へ車を走らせた。幸運にも途中でマドリード行きの軍用トラックと出会い、スペイン人将校にそのトラックに乗り移ってもらった。

おそらく、その将校をマドリードまで乗せて行ったら、リースは敵前逃亡幫助罪で処刑されていたことであろう。

ブルネテの戦闘後、イギリス人医療部隊の本隊が国際旅団に編入されるという噂を聞き、国際旅団の指揮下で任務につくことに嫌気がさしたリースは、マドリードとバレンシアの中間に位置するクエンカにあるイギリス人の管理する回復期患者病院に転属を願い出て、それを受理された。

しかし、この病院もスペイン共和国軍衛生部指揮下にあり、したがって、国際旅団衛生部直轄となっていた。この病院で働くことは、たとえ非戦闘員であっても、国際旅団の指揮系統下で働くことを意味していた。

クエンカの病院は鬱蒼とした森のなかにあって、ぞっとするほど不気味な灰色の建物であった。この建物は、かつてこの辺で湧いていた温泉の保養所だった。

病院には常勤の医師がいないので、その地方の比較的大きな病院から定期的に派遣されていた。やがて、イギリス人医療部隊の責任者たちが視察と称してやってくるようになり、病院も6人からなる運営委員会によって管理・運営されることになった。リースも運営委員に選出された。病院では、奇妙なことが突如起こった。それは、「政治的」(political)という用語の使い方をめぐってだった。たとえば、ひどく酔っぱらった運転手に救急車を運転させるのは悪いことだと同僚に説明するときに、「政治的に間違いだ」(political mistake)と言わなければならなかった。リースには笑止千万なことであったが、この病院内の空気からして黙殺せざるをえなかった。

病院は前線から100キロも離れていた。そのために、ここは政治的任務を帯びてイギリスから来た連中の休憩所や情報交換所となっていた。そうしたイギリス人のなかに、共産党員の一青年がいた。彼は反カトリックのプロパガンダを意図していたのか、無人となった教会に入り、神父のミサ用の祭服を見つけ出して身につけ、いろいろとふざけまわっていた。付近の村人たちは遠まきにそれを眺めるだけで、だれも彼のふるまいを止めさせようとはしなかった。そのうち、彼は教会の鐘を鳴らしはじめた。すると、畑仕事をしていた老農夫があわてて駆け寄ってきて、彼からそのローブをひったくってしまった。

この鐘はすでに教会の「お告げの祈り」を知らせるためには用いられず、火災警報として使われていたものだった。その青年はこのことで村人から輦轡を買い、まもなく病院から姿を消してしまった。内戦期の共和派の地域といえども、反教権主義の根強い大都市を除いて、結構信仰篤く、瀆神の行為は疎まれがちであった⁽¹⁵⁾。リースはこの病院で7週間働いた。そのあいだ、彼はほとんど医療らしい医療に従事することもなく、もっぱら政治的なもめ事の解決に奔走せねばならなかった。

(15) Sanchez, Jose M. *The Spanish Civil War as a Religious Tragedy*, University of Notre Dame Press, 1987, pp. 61-9.

病院でも明らかに共産党系が主導権を握るようになると、共産党と政治路線の異なる職員は排除されるようになった。たとえばこの病院には、医療関係者以外に賄い係としてたくさんのスペイン人女性が働いていた。そのなかに、非常によく働く若い女性が一人いた。ところがある日、ほかの女性たちが彼女と一緒に働くのを否定し、彼女を職場から追放するよう運営委員会に申し出てきた。リースがその処理係となって事情を調べたところ、例の若い女性がアナキストだからというのがその理由だった。彼のたび重なる説得によって、ようやく彼女たちは妥協することになったが、賄いの仕事の能率低下は目を覆うばかりであった。

こうした雑用にかかわっているあいだにも、リースはたえず共産党へ入党するよう勧められた。これは、彼のもっとも避けたいと思っていたことだった。

スペインに6カ月滞り込んで自分なりに得た結論は、共産党に入党し、このスペインで党の手足となって働くか、そうでなければスペインにいても意味がないのでイギリスに戻るかのどちらかだった。リースの気持ちはすでに決まっていた。

5 「クエーカー」の救援組織に加わる

1937年10月、結局、リースはイギリスに戻った。ロンドンでプロパガンダに従事してほしいとの要請を義勇兵派遣事務所から受けたが、彼はそれを断った。スペインの共和国陣営の実態を知っている彼にとって、政治的プロパガンダに従事することは耐えがたかったからである。彼は、旅装を解いて友人と再会する暇もなく、クエーカー教徒の「スペイン救援組織」(Quaker's Spanish Relief Organization)に加わった。

翌38年1月、スペイン救援組織の一員として、すでに共和国の首都(37年10月31日以降)になっていたバルセロナにふたたび足を踏み入れた。

この組織はもともと政治的党派とは関係なく、純粋に宗教的博愛主義の精神にもとづいて医療、食料品などの配給に従事する唯一の非政治団体であったろう。

毎日、ミルク、パンなどをバルセロナの8万人の学童のために確保する仕事は容易ではなかった。しかも、ミルクはバルセロナだけではなく、カタルーニャ全域の母親や幼児にも供給しなければならなかった。

リースの任務は18台の運送トラックの配送係だった。アメリカのクエーカー教徒の団体から送られた小麦粉をパン屋に運び、焼いてもらって供給するのが日常の仕事だった。トラックの整備はもちろんのこと、人員の確保も怠れなかった。

当時、優に百万を越すバルセロナ市民が、石鹼やタバコといった日用品に事欠くだけでなく、エンドウ豆と干鰯だけで飢えをしのいでいた。トラックの上から舗道へドスンと放り投げられる干鰯が舗道のほこりを舞いあげているのを見ると、餓死寸前でないかぎり、食欲が起こらなかった。

ともあれ、クエーカー教徒の組織は可能なかぎりの力を発揮して、バルセロナを餓死から救った。しかし、戦況が共和国軍に不利に働くにつれ、クエーカー教徒の組織のある建物の壁に落書きが描かれるようになった。「弱虫」「腰抜け」「子供にミルクを配ることは、反ファシズム闘争の何の役

にも立たない」⁽¹⁶⁾などであった。

こうした落書きを見て、クェーカー教徒の組織の人たちが傷ついたのは当然だった。リースは、この戦争はスペイン人同士の戦争に過ぎず、自分とはまったく関係のない出来事だと認識するようになった。

この間、リースはイギリス本国と連絡が絶えていたらしく、たとえばジョージ・オーウェルが八方手を尽くして彼の消息をさがしまわっていた。オーウェルはジャック・コモン（Jack Common）宛ての1938年3月末頃の手紙で、リースの身の上を案じている。

Where is Rees? Is he in Spain? I hope to Christ he'll get out before Franco gets to the coast.

No doubt they wouldn't shoot him if he only with an ambulance, but there's bound to be some unpleasantness.⁽¹⁷⁾

1939年1月26日、バルセロナは陥落した。その直後、クェーカー教徒の組織が、バルセロナの救援組織と、フランス国境へ向かう避難民の救援組織に二分されることになった。リースは後者のグループに配属された。バルセロナからピレネーへ向かう幹線道路には、わずかの家財道具や食糧をかかえ、あるいは病人や幼児を背負って憔悴しきった共和派の避難民の列が絶え間なく続き、その人数はほぼ50万人に達したという⁽¹⁸⁾。リースらは、避難民のために移動簡易食料配給所を設営しながら、10日間かけてピレネーへと移動し、フランコ軍の追撃寸前に国境を越えてフランスに逃げ込むことができた。

しかし、リースらはともかくとして、共和派の避難民たちが国境の彼方に別個の平和で幸せな世界があると思っていたのは無理からぬことではあったが、現実には幻滅そのものであった。フランス側の国境の町ル・グールには、避難民の点検場として大規模な収容所が開設されていた。そこでは、惨憺たる逃避行のあいだ、ひと時も離れなかった家族が銃や銃剣で強引にばらばらにされ、成人男子は敵性外国人として他の収容所へ移動させられた。女や子供たちが入れられた収容所も有刺鉄線に囲まれ、屋根もなく、武装した監視兵つきであった。そこでも家族がばらばらに隔離され、風雨を避け、暖を求めて、まるで動物のように地面に穴を掘るといった有様であった⁽¹⁹⁾。

リースらのクェーカー教徒の組織やイギリスの救援組織のおかげで、イギリス人が管理する収容所が設営されたり、メキシコへ避難民を亡命させる救援船が派遣されたりしたが、それも焼け石に水であった。

やがてパリ郊外に子供たちだけの収容所が設置され、その救援のためにリースらも同行した。ところが40年6月14日、ドイツ軍がパリを制圧したために、リースらは子供たちを引き連れてふたた

(16) Rees. *A Theory of My Time*, p.108.

(17) Orwell, Sonia & Angus. Ian. eds. *An Age Like This, 1920-1940*, 1994, p.311.

リチャード・リースはどこにいますか。まだスペインですか。フランコが海岸線に到着する前に、彼が抜け出すことをキリストに祈ってます。彼がただ救急車といっしょにいたというだけなら、もちろん銃殺にはならないでしょう。しかし、不愉快な目に会うことは間違いありません。

(18) Broue, Pierre et Temine, Emile. *La Révolution et la Guerre d' Espagne*, les Editions de Minuit, 1981, p.500.

(19) Mitchell, David. *The Spanish Civil War*, Granada, 1982, pp.185-7.

Preston, Paul. *The Spanish Civil War, 1936-1939*, Grove Press, 1996, pp.160-6.

びピレネーへと向かった。フランス政府はボルドーに政府機関を置いた。リースらの救援組織の人びとも、子供たちとともに第二次大戦終結までボルドーに逗留することに決めた。しかし6月22日、フランスのペタン（Henri Philippe Pétain, 1856-1951）内閣が対独休戦協定に調印し、やがて対英断交が予想されたために、子供たちをすみやかにスペインへ送り返し、リースらは間一髪のところ、イギリス南部のサウザンプトンに上陸することができた⁽²⁰⁾。

帰国後、リースはイギリス海軍に志願するが、40歳になっていた彼は戦闘要員としては年齢的に無理と判断された。それで、イギリス海軍の予備役となり、艀装した輸送船の砲手として乗り込むことになった。この船はセメントや石炭を積んでいる8人乗りの船で、彼だけが砲を担当することになった。それも、対潜水艦用の12ポンド砲と機関銃であった。

この船では戦闘らしい戦闘も経験しないうちに、次に機関銃手としてイギリス海軍の新造の大型砲艦に乗り込んだ。スコットランド南西部のクライド湾からウェールズ南部のカーディフへの処女航海中にリースは41歳の誕生日を迎え、またはじめて機関銃で敵機を撃ちおとすことができた。しかし、この砲艦も爆撃を受けて航行不能となり、修理その他で長期間、ドック入りすることになった。やむなく彼も陸上勤務をしなくてはならなくなり、短期の海軍砲術訓練隊に入隊した。

1941年夏、リースは海軍予備少尉としてイギリス海軍省で情報関係の任務につく。ここでは二年間勤務した後、翌43年、フランス海軍省へ派遣され、通信士官として地中海作戦とコルシカ上陸作戦に加わった。翌44年8月25日、パリの無血解放にも加わり、二階級特進し、フランス政府から十字勲章を授けられる。フランスで終戦を迎えた。

6 帰国後の活動 絵筆と文筆

戦後、イギリスに戻ったリースは、ふたたび文筆活動を開始した。だが、スペイン内戦に関していえば、他の多くの義勇兵のように回想録を発表しなかった。リースは自分のスペイン体験を回想録にして発表するほどのものではないと判断していた。というより、そうしたものは、せいぜい誤解にもとづくものか、まったくの偽りのものでしかなく、しかも多分にプロパガンダ的要素の強いものである。このような洪水に耐えられるものは、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』(*Homage to Catalonia*, 1938) とフランツ・ボルケナウ (Franz Borkenau) の『スペインの戦場』(*The Spanish Cockpit*, 1937) だけであり、さらに一冊加えるとすれば、獄中記ではあるが、アーサー・ケストラー (Arthur Koestler, 1905-83) の『スペインの遺書』(*Spanish Testament*, 1937) である⁽²¹⁾、とリースは考えていた。

当初、リースの文筆活動は異彩を放つものではなかった。戦後の混乱に彼の社会的な意識がついていけなかったからである。突如、彼は油絵の筆を握りはじめた。この方向転換は、多くの友人たちの心配の種となった。ロンドンの美術学校に、45歳になって通い始めたからだ。だが、おの

(20) Stein, Louis. *Beyond Death and Exile: The Spanish Republicans in France, 1939-1955*, Harvard University Press, 1979, pp.16-7.

(21) Rees. *A Theory of My Time*, p.109.

れの才能を知るものはおのれ自身だというべきか。やがて、彼の油絵は王立美術院（RA）、王立美術協会といった権威ある展覧会に出品されるようになり、画家として身を立てられるようになった。王立美術院会員にも推輓された。

ところで、リースが油絵に専念するかたわら、文筆もおこたらなかったのは、1930年代に知り合いになったジョージ・オーウェルをはじめとするかつての文壇仲間がいたためであるが、油絵を始めた頃、フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909-43）の著作に接したことも見逃すわけにはいかない。

ヴェイユは、1909年にパリのユダヤ人医師の家庭に生まれ、秀才の誉れ高い高等師範学校を卒業し、女子高等中学校教師、工場労働者などを経て、1936年8月にスペインのアナキストの戦列に担架兵として加わるが、負傷して1ヵ月後に帰国した。彼女は第二次大戦中、ドゴールらを中心とするロンドンの対独レジスタンス「自由フランス国民委員会」に参加し、フランス潜入を志願するが入れられず、祖国の同胞と苦しみを分かたため、自ら食を断って、1943年8月30日、栄養失調と肺結核のためにイギリスのケント州アシュフォードのクロスプエナ・サナトリウムで死去した。享年34歳。したがって、リースとは一面識もない。しかし、ヴェイユの生涯と著作が、彼の戦後の文筆活動や人生の再出発の原点になったのである。

リースには、もう一人、気になる作家がいた。D. H. ロレンス（David Herbert Lawrence, 1885-1930）である。リースはケンブリッジ大学在学中にロレンスの作品を読んでしたが、その背後にひそむ宗教観、文明史観についてはまったく理解できなかった。戦後の混乱のなかで、リースは、ロレンスが身をもって実践したモラリスト的側面を一つの文学的啓示とみなしたのである。

リースはヴェイユとロレンスという、まったく異なる二人にとりつかれたように没頭し、1958年には、『勇敢な人びと D. H. ロレンスとシモーヌ・ヴェイユの研究』（*Brave Men: A Study of D.H. Lawrence and Simone Weil*, 1958）⁽²²⁾を刊行した。これはリースの処女作であり、まったく異質な両者の比較を通して、宗教観や歴史観の共通点を発見しようとした特異な研究書である。

これ以降、ヴェイユの著作の英訳を4冊、評伝『シモーヌ・ヴェイユ ある肖像の素描』（*Simone Weil: A Sketch for a Portrait*, 1966）⁽²³⁾など、ヴェイユ研究とその紹介につとめ、イギリスにおけるヴェイユ研究の嚆矢となっている。

また、オーウェルとは相変わらず親密な関係が続いた。オーウェルが44年に養子をももらったときに、その子にリチャードと名付けたのも、父親のリチャード・ウォームズリー・ブレア（Richard Walmesley Blair）からだったかもしれないが、オーウェルが全面的に信頼を寄せていたリースからだったかもしれない。

リースは1961年に、『ジョージ・オーウェル 勝利の陣営からの逃走』（*George Orwell: Fugitive from the Camp of Victory*, 1961）と題したオーウェルの評伝を出版した。ちなみに、その副題の「勝利の陣営からの逃走」は、ヴェイユが1940年から43年にかけての思索の覚え書き『ノー

⁽²²⁾ Rees, Richard. *Brave Men: A Study of D.H. Lawrence and Simone Weil*, Victor Gollanz, 1958. 邦訳、『D. H. ロレンスとシモーヌ・ヴェイユ』川成洋・並木慎一訳、白馬書房、1985年。

⁽²³⁾ Rees, Richard. *Simone Weil: A Sketch for a Portrait*, Southern Illinois University Press, 1966.

ト』(第3巻)からの引用である。この評伝は、数あるオーウェルの評伝の中では、最高峰に位置すると言われている⁽²⁴⁾。「時代の優勢な流れに逆らうのが、しばしば、いや、おそらく常に真剣で責任のある知識人の果たすべき使命」⁽²⁵⁾と認識したために、「第一級の文学者になるほどの個性と才能をもって生まれても、書くことのみで才能をつぎ込むことのできない時代に生き」⁽²⁶⁾、それがゆえに、バートランド・ラッセルの言葉を借りるなら、「絶望のあまり死んだ」(die of despair)⁽²⁷⁾ ジョージ・オーウェルを、リースはこよなく愛したのである。

リースとオーウェルとの友情は1950年1月21日のオーウェルの死去まで続いた。

死の床に横たわったオーウェルは1月18日付の遺言書で、彼の書籍、定期刊行物、原稿のうち、妻のソニア(Sonia)が受け取った残りのものをリースに贈り、また著作物関係遺言執行者をソニアとリースに委任したほどであった。だが、1960年にオーウェルの夫人が「オーウェル文献資料室」(the George Orwell Archive)をロンドン大学に開設したとき、リースは全面的に協力した⁽²⁸⁾。

1970年7月24日、リースはロンドンの病院で心臓の手術を受け、そのままふたたび目をさまさなかった。あまりにも急だったため、彼の臨終には、誰も立ち会えなかったという。こうして、根っからの自由主義者が70歳の生涯を閉じたのである。サー・リチャード・リースは生涯独身だった。したがって、彼の爵位の後継者はいない。

(かわなり・よう 法政大学工学部教授)

(24) Gross, Miriam. *The World of George Orwell*, Weidenfeld and Nicolson, 1971, p.167.

(25) Rees. *George Orwell: Fugitive from Camp of Victory*, p.8.

(26) Ibid., p.76.

(27) *World Review*, June, 1950.

(28) Shelden. op. cit., p.487.